

# 江亢虎・中国社会党の史料について

—— 上海図書館における史料調査覚え書き ——

伊 東 昭 雄

1. 始めに
2. 江亢虎と中国社会党
3. 新民主主義と新社会主義
4. 汪精衛政権への接近と中国社会党の再建
5. 結びに代えて

(付) 江亢虎資料目録 (未定稿)

## 1. 始めに

筆者は1993年9月末から10月初めにかけて、上海で江亢虎および中国社会党についての史料調査を行なった。この時期は丁度中国には珍しい連休とぶつかったため、十分な調査を実施することはできなかったが、それにもかかわらず、同行した本学大学院生陸偉氏の助力をえて、予想外の成果を上げることができた。そこで今回の調査結果を含め、これまでに明らかにしえたことをここに書き留めて、今後の研究の足がかりにしたい。

それにしても、史料調査をまだ始めたばかりで、しかも事情により、捜し当てた史料のごく一部分しかコピーを持ち帰ることができなかったにもかかわらず、この様な一文を草することには大きな不安があり、筆者としてはすこぶるためらいがある。それにもかかわらず、敢えて今筆をとったのは、ここでこれまでの調査結果と自分の考えてきたことを一応まとめておくことによって、今後の調査と研究をさらに前進させることができるのではないかと考えたからである。それに、上海図書館における史料調査を完了するだけでも、そのためだけに上海に一月以上滞在することがおそらく必要であり、それをいつになったら実施できるか、今のところ全く見当がつかないという事情もある。

江亢虎という人物については、日本では専門家を除いて、ほとんど知られておらず、中国自体でもほぼ忘れられている。そのような人物になぜ筆者がこだわるのかといえば、その理由は二つある。まず第一には、江亢虎は1912年（民国元年）中国社会党を創立した人物であるからである。中国では無政府主義の運動はすでに清末から行なわれていたが、社会党を名乗る結社が設立されたのは、これが最初である。この結社は、江亢虎自身が語るところによれば、党員は約五十万といわれるが、それがどのような組織と綱領を持ち、また中心人物であった彼自身はどのような社会的変革を目指していたかを明らかにしたいと筆者が以前から考えていたからである。

しかし今一つには、そのような江亢虎という人物がその後紆余曲折を経て、日本軍占領下の南京で中国社会党を再建し、汪精衛政権に考試院院長として協力するようになった理由を明らかにしてみたいと、これもかなり以前から念願していたからである。そしてこの二番目の問題に関しては、今回の調査で予想外に江亢虎自身の著作や史料を入手することができた。そこでこれまでに目を通すことができた彼の著作や史料を用いて、中間的な一応のまとめをしておきたいと考えた次第である。

## 2. 江亢虎と中国社会党

江亢虎に関する伝記資料は、今のところきわめて乏しい。日本人が書いたもので、この人物についてふれている数少ない文献の一つに清水安三の『支那当代新人物』があるが、これやその他の文献を参照しても、彼の幼少時や青年期については、江西省に生れ、後に日本や欧米に留学し、ヨーロッパでアナキズムの影響をうけたこと、清末から教育、とくに女子教育に関心を持ち、女学校を開いたこと、などがわかるのみである。彼が辛亥革命前後の革命闘争に登場するのは、やはり中国社会党創立からであり、その当時の中国社会党の綱領や組織については、『江亢虎文存』に収められている宣言文や論説等からほぼ明らかである。彼はアナキズムの強い影響を受けていたが、民国初年の社会主義・無政府主義の結社の多くがそうであったように、かならずしも明確な理論を持ってはいなかったと考えられる。この結社は当時の若い知識人・学生達が参加し、李大釗も一時この結社に加わっていたということである。しかしこの党は1913年(民国2年)、時の袁世凱政権によって弾圧され、江亢虎自身も海外に逃れ、欧米で生活することを余儀無くされている。七年間の亡命生活の中では、アメリカ滞在が長く、「米国に渡ってからの彼は、加洲大学の講師として、支那の大学を米人学生に紹介したり華府の図書館の東亜部の司令官をしたり、種々

(ママ)

の事をやって渡世して来た。その間七年に亘って、加洲大学からはドクトルオフヒイロソフイの学位をうけた。民国十一年（1922年）一寸帰朝して、未だ席の温らざる裡に欧露に向ひ労農政治を視察し一年間、調査研究した。」（『支那当代新人物』230ページ）

その頃上海では南方大学が設立され、江亢虎が校長として招かれた。彼は1922年10月校長に就任し、北京・南京・漢口・江西の各地に講演旅行をして学生を募集し、600人余の男女学生を集め、急遽大学ができあがったということである。この南方大学は独特な大学であったようで、「特別規約」なるものがあり、私学の常として、学生の支払う授業料のみで学校を維持する外、国学を尊重するが、科学の研究も怠らず、国語を用いて講義をするが、英語の学習にも心掛ける、ヨーロッパに心酔して国粋を放棄したり、逆に英語の学習を放棄したりしてはならないとしている。それに「本校の財政は公開であり、校務はすべて行政会議を通過する。学生個人はみなこの会議に建議し、学生代表は会議に参加する。ただ議決および執行の権限は校長にある」というユニークな制度を含んでいた（前掲書、232ページ）。しかしこの制度はその後この大学に学生や教職員による江校長排斥運動が起こる一因にはなったと思われる。

この南大駆江運動事件については、上海南方大学学生会の編集に成る『江亢虎陰謀復辟及南大駆江運動紀実』という100ページ余の史料があり、江亢虎自身のこの事件に関する発言もあるが、それらを詳細に検討する機会が与えられていないので、この事件についての考察は別稿に譲らざるをえない。ただ現在いえることは、この事件の発生は、前述の南大の特色のほか、江亢虎自身にも原因があったと推定される。それは、清水安三のことばによれば、「強ひて彼の短所を求むれば彼が、自家の主義を立てて、孫文に行かず、陳独秀に来らず、然らばとて李大釗とも手をにぎれず、胡適とも共力できぬところにある彼は学者であらう。けれどもそう早く自家

の説自家の主義を把持して動かないでもよからう。自家の学説をちゃんと立ててそれに籠るのは、独り彼のみならず支那学者の通弊である」(前掲書、236ページ)ということもあったと思われるし、彼のアメリカ滞在中に、彼の思想・学説と学生達の思潮との間の距離が開いて居たことも考えられる。彼はその後次第に政治的に孤立していったが、そのような彼の傾向が強まったのにはこの事件も影響があったと推定される。しかし目下のところまだ十分に史料を検討していないので、そう断定するのは慎重でありたい。

### 3. 新民主主義と新社会主義

アメリカから帰国した後、一時ロシア革命を観察するためにソ連に赴いたが、その後は国内で政治活動を再開する一方、旺盛な著作・講演活動を行っており、彼の主要な著作の多くが帰国以降の1920年代に書かれている。『洪水集』、『新俄游记』、『新民主主義新社会主義説明書』、『新民主主義新社会主義』、『南方廻想記』、それに『江亢虎博士演講録』第一集から第四集まで、『江亢虎文存』の下編や『思想一斑』所収の諸編等がそれである。これらのなかで、筆者が目にすることができたものから、当時の江亢虎の「新民主主義」・「新社会主義」の特徴を分析しておきたい。

清末から民国初年にかけて、社会主義研究会や中国社会党を組織した頃の江亢虎はかなりアナキズムに傾いていたが、「新民主主義」・「新社会主義」を唱え、「中国新社会民主党」をつくった時には、アナキズムとは完全に訣別していた。当時はすでに中国共産党が成立しており、マルクス主義に基づいて階級闘争を重視していたが、彼は共産党とも一線を画していた。彼は中国社会のさまざまな社会問題を解決するために階級闘争の手段はとらず、彼のいわゆる「新社会主義」、つまり資産公有と労働報酬の公正化、教育の普及によって達成しようとした。そのような「新社会主義」

への改革を保障するのが「新民主主義」の諸制度であった。

彼の主張する「新民主主義」は「選民参政」、「職業代表」、「立法一権」から成っている。「かつて十分な教育を受け、参政試験を通過し、所属職業選挙を経た者を選民とし、これに直接間接選挙権をあたえる」のが「選民参政」である。そして「国会および省・県・市議会は等しくそれぞれの職業の有する選民の人数に応じてその代表権者の数を比例配分する。人数過少の職業については、その隣接する職業と合せて代表を選挙することができる。」これが職業代表である。最後の「立法一権」は立法権を三権の中心におき、「立法機関は司法および行政機関の母体となり、[国会の]議長は国家元首となり、行政委員長は責任内閣制の総理となる。<sup>1)</sup>

以上のような彼の社会制度改革のプランを見ると、「資産公有」という項目を除けば、孫文晩年の新三民主義とさほど大きな違いはなく、「選民参政」などは孫文のいう「先知先覚者・後知後覚者・不知不覚者」と発想がかなり似ているように思われる。少なくともこの段階では江亢虎は共産党よりもむしろ国民党に近い位置にいたことは確かである。

この時期の彼の政治活動の一つに、段祺瑞臨時政府執権の招集する「善後会議」への参加がある。彼がこの会議に参加した事情は明らかではないが、おそらくは「善後会議条例」第二条のに第四項目に規定されている「特殊の人望、学術、経験のある者で、臨時政府執行によって招請または任命された者、ただし三十人を越えることができない<sup>2)</sup>」という会員のなかに含まれたものと思われる。「善後会議会員録」は1925年2月21日に発表されたということであり、江亢虎自身は同年2月末または3月初頃に「善後会議と国民代表会議の前途の大意」という演説をし、3月10日に他の10名の連署により「国民代表会議条例を速やかに審議し、自主的に憲法草案を求める等の四項目提案<sup>3)</sup>」を提出している。彼の演説や提案を見ると、善後会議が軍閥の介入によって混乱を来すことを避け、議題を国民代表会

議条例と憲法草案の起草だけに限定しようとしている様子が読み取れる。

彼の考えている社会主義への改革のなかでは教育改革が重要な位置を占めるので、この時期にも教育振興の為の努力は続けられたと思われるが、それについてはまだ調査が進んでいないので、別の機会に譲る。

#### 4. 汪精衛政権への接近と中国国民党の再建

孫文の在世中から国民革命の時期にかけて、江亢虎と国民党の間には比較的良好な関係が続いていたと思われるが、4. 12クーデター以後の十年内戦中、とくに蒋介石が「訓政」を実施して独裁を強化すると、江亢虎の国民党政権に対する批判は急速に強まったと考えられる。そのことを江亢虎は後に次のようにいっている ——

「国民党は最初に革命を唱え民国を創建した同盟会の後身であり、本党（中国国民党）のもっとも古い友党の一つである。辛亥の蜂起には、本党は率先して共和に賛同した。もともと本党の成立は国民党の一年前であり、宋[教仁]事件が発生し、袁[世凱]氏が[民国に]反乱を起こすと、本党は率先して反対を打電し、そのために武力で踏みにじられ、解散させられたのも国民党の一年前であった。私が海外に亡命していた時、国民党の領袖と患難を共にし、同じく友邦の人々や華僑の招待と歓迎を受け、いつも隔てのない親しさであった。国民党が聯ソ容共政策をとった時、たまたま私がソ聯旅行から帰り、その政策を止めるよう忠告したが、その時から意見の相違が露呈した。北伐が完成すると、国民党は一党専制となり、政見の隔たりはいっそう大きくなった。十二年来私は敢えて政治を口にしなくなり、しかもなおしばしば圧迫を受けて、ほとんど危殆に瀕した。国民政府が成立してから、国民党の威勢はいよいよ上がり、その上共産党の政策を採用して、前よりいっそう悪くなった。強者は党の権威を頼んで横行し、弱者は党に依存して自利を図り、人民

の恨みがつのっている。現在は非常の国難ため、幸いに党の抑圧は少し緩められている。重慶の国民党員はすでに訓政を終わらせ、憲政を目指すことを承諾している。汪精衛氏の指導する新国民党はとりわけ各党各派や無党無派を連合することを呼び掛けている。本党はこの機会に乗じて組織を回復し、ともに和平救国運動に従事し、かくして友好関係をさらに一歩進める。今後希望したいのは、たがいに励ましたがいに誤りを正し、争友となり、畏友となり、益友となるならば、両党の幸福であり、また国家の幸福でもある。<sup>4)</sup>」

この文章が発表されたのは1939年11月11日上海でのことであるから、内容はいくらか割り引きして考えるべきかもしれない。しかし共産党とは明確に一線を画していたことは、これまでの考察から明らかであろう。<sup>(補注1)</sup>しかし国民党に対して激しい敵意を抱くようになったのは、断定はしがたいが、おそらくもう少し後のことであろうと推測される。江亢虎の主著である『江亢虎文存』が1932年上海中華書局から出版されようとした時、この書物が国民党中央党部の全国出版審査委員会によって発禁処分をうけた。<sup>5)</sup>この書物には中国社会党や社会主義に関する文章もいくつか含まれてはいたが、その内容は共産党やコミンテルンとはほとんど全く関係がなかった。それにもかかわらず、国民党中央党部はこの書物を発禁処分にしたのである。これまで江亢虎が国民党に対して抱いていた信頼感が一挙にくずれたであろうことは、想像するに難くない。このことが彼の蒋介石と国民党に対する敵意を高めるのに、かなりの影響があったであろうことは、彼が『江亢虎文存』をそっくり汪精衛政権下で出版したとき、それにつけた「再序」からかすかに読み取ることができる。なお、『江亢虎文存』には1944年1月出版の「初版」—— 筆者が上海で見たのはこれである —— のほかに、1932年の「原版」も存在するというのである。<sup>6)</sup>

江亢虎が上海で出版した『江亢虎対時局宣言』では、「抗戦軍が起こっ



て以来、南北に居を移し、自分の目で国土が占領され、人民が塗炭の苦しみを嘗め、壮烈な犠牲となり、流浪の悲惨さを見るにつけ、心の痛みは極度に達したが、どうにも手の施しようがなかった。幸いなことに、天の心は戦乱に飽き、時局は急変して、双方に悔悟の誠意が兆し、前途に和平の曙光がかすかに現われてきた。たまたま欧州大戦がふたたび起こり、国際戦線は紛乱し、まことにこの機に乗じて自ら痛んで一念発起し、次植民地の地位を抜け出し、画期的新外交を樹立し、極東問題を根本的に解決し、復興と建国の大業に努力し、千載一遇の機会に背かないようにしよう」ということで、「平民の資格において可能な範囲内において公開の和平救国運動に従事する」として、七項目の綱領をあげている ——

「一、中日の対等な和平、荣誉ある和平を促進する。

一、中国の主権の独立と、民族の自由と、領土保全を保持する。

一、一党支配を排除し、政権を開放し、民主的な立憲政府を組織する。

一、国家資本を集中し、社会事業を發展させ、生産と分配を統制し、教育と就労 [の機会] を普及する。

一、中国の固有の文化を中心とし、東亜新秩序を建設する。

一、文化と経済の合作と、軍事と政治においてたがいに侵犯しないと  
いう原則の下で、各友邦が協調する。<sup>7)</sup>」

これらの項目はその後再建された中国社会党の「臨時党綱」となった<sup>8)</sup>もので、時代の刻印は覆うべくもないが、江亢虎自身の年来の主張もそこに盛り込まれていることは疑いない。日本軍の占領下における党再建ということの善し悪しは別として、彼の中国社会党再建にかける熱意はいまだ少しも衰えてはいない。そこにこそ、彼にとっての原点が存在したといっても誤りではなからう。

しかしそれにしても、なぜ彼は傀儡政権に敢えて協力する気持ちになったのか。そのことをはっきりさせるために、彼の共産党に対する見方を検

討しておきたい。彼は次のようにいう ——

「共産主義はもともと社会主義の一種であり、その最高の理想は社会主義と同じである。しかしロシアが〔革命を〕実行して以来、用いた手段は陰謀・武力・煽動・暴動・暗殺・報復・威圧・専制等々ばかりをことさら用いており、しかもどんな手段を用いようとも、すべて正当であると公然と宣言している。そこで殺人や悪事を働くのも当然のことと見なす。かくして人類の道徳はほとんど滅びようとしている。その主張を総合すれば、階級闘争やプロレタリア独裁の諸学説であり、それを主張するには根拠があり、主張は理論の裏付けがあるとはいえ、その結果は大多数の人民を苦しめるばかりであり、ロシアの前後二回の五か年計画の成績は優良であったにもかかわらず、その人民が享受している自由と物質はなお欧米各国の水準以下である。己れと対立する者を抹殺し、同じ党内で反目しあい、その残忍苛酷さは各国の政治的罪悪よりはるかにまさる。事実は明確であり、心肝を寒からしめる。中国共産党はコミンテルンの直接の指揮を受け、時に応じて政策を変更するが、それは学理の進歩でもなければ方法の改良でもなく、大衆をだまして政権を奪取するために、環境に適應する機会主義である。外蒙古がソ連に隸属し、新疆が〔ソ連の〕手先となり、陝西・甘肅にはルートを通じて特別区政府を樹立し、中国共産党は赤色帝国の先遣隊たるのみならず、近くは国共合作を利用し、対日抗戦を利用し、義勇軍や游撃隊を利用して、その勢力を各省に蔓延させている。連ソ容共もついにここに極まったのだ。私が思うに、国内に国を立て、かつ他国に命を聞き、軍事・行政の統一を破壊すること、およびあらゆる公開以外の言論や行為は断固として取り締り禁止すべきものである。」<sup>9)</sup>

このような彼の見解は、当時としては決して珍しいものではなく、抗日民族統一戦線を結成させたのは何よりもまずコミンテルンの謀略であり、

それを中国共産党が行動に移し、たくみに中国国民党を謀略に乗せたことになる。しかも江亢虎の場合には、すでに見たように、中国国民党に対して激しい敵意をもっていたから、これらのことすべてが彼を抗日民族統一戦線から遠ざけたといつてよかろう。それ故に彼が日本軍制圧下の傀儡政権に接近したことは大いにありうると思われる。それでは彼は日本軍や日本政府に対して幻想をもっていたのかといえ、決してそうではないようである。その点について見ておきたい。

「九・一八事変当時、私はカナダにあって、「謹んで日本政府および日本国民に告げる書簡」<sup>(補注2)</sup>をしたため、日本カナダ駐在徳川公使に手渡して転送していただいたが、当時はまだ両民族がより大きな衝突を免れることができるよう深く念願していた。いわゆる道に迷ってまだ遠くまで行っておらず、ふりかえれば岸が見えたのである。不幸にして事変はますます広がり、形勢はいよいよ凶悪化し、ついに二年来の惨劇を演じたのである。日本は絶え間なく侵略し、中国は終わりなき抗戦を続け、究極においてはいたずらに人民を苦しめた。日本の侵略は、当初は少数の軍閥の首謀者から始まったが、その後宣伝が世論を形成し、世論が心理を醸成して、いまではこの国の一般大衆や多数の青年達も今回の戦争を東亜新秩序建設のための聖戦であると確信している。その口実は、独裁政権を打倒し、赤化の侵入を防止し、英米仏の植民地の束縛から離脱させ、暴君を討伐して人民を救う軍を起こすのだと厳かに宣言している。その口実がこのようなものであったばかりでなく、その目的や動機もまたこのようなものであったであろう。しかしその結果はどうであったか。独裁者蒋介石氏は打倒されないばかりでなく、日本の圧迫によって、かえって中国の民族的英雄にしてしまった。国民政府もまた打倒されず、分裂し改組して方針を変更しただけに過ぎない。蔣氏の側近の重要な腹心達はみな安全にゆったりと暮らしている。借款で軍費を調達している官吏

は国難のおかげで大儲けし、平時の十倍百倍の巨富を築いている。軍隊を率いて国土を守る將軍達は賄賂や略奪品を満載して、租界や後方に向かってゆったりと退却する。正規軍もまた戦略の関係ということで、まだ敵に遭遇しないうちに陣地を移し、時を待って大挙して反攻するのだといっている。赤化は防止できないばかりか、共産党内は一致抗日のスローガンの下で、次第に国民政府[の権限]を奪ってこれに代わりつつある。紅軍は国軍に編成され、辺境防衛特別区を設けて独立自主し、至るところで游撃戦・消耗戦を行なっている。中ソの関係はますます親密になり、交通や通信は頻繁になり、たがいに侵犯しない関係から同盟を締結し、武器[援助]に関する条項や軍人・技術者を絶えず供給する取り決めは、中国朝野の心理を変化させ、みなソ連を我が民族を平等に待遇し、実力で抗戦を援助する唯一の友邦と見なすようになっていく。英米仏は国家経済と国民外交で蔣氏を支援して日本に反抗し、一方では植民地で莫大な利益を獲得しながらも、一方では中国人の感情を深いところで捉えている。しかるに日本の飛行機・大砲の爆撃・砲撃しているのは、中国の最も善良で柔順な老若男女および一般の最も平和を愛し最も搾取を受けている平民なのである。恨みは人心を害し、報復は止むことがなく、一朝の怒りは九世の敵となり、かくしてこれまで抗日でなかった者も今は抗日となっている。従来反蔣であった者も今では擁蔣にまでなっている。一回の空襲は十年の親善工作を帳消しにしてしまう。侵略でえたものは和平の利益の十分の一にも及ばない。日本がもし真に和平を愛し、真に親善を欲するなら、どうしても武力政策を改めて、中国人民全体の福利を前提としなければならない。事実は雄弁に勝り、環境は心理を変える。中国人民の心理が変わらなければ、日本の侵略はもとより失敗するであろうし、親善もまた成功しないであろう。<sup>10)</sup>

このような日本に対する見方は汪精衛一派のものとも違い、日本の「東

「亜新秩序」の提唱にも何の幻想ももっていないことは明らかである。むしろ日本を利用して、コミンテルンや中国共産党の戦略に対抗しようと考えたのかもしれないが、もしもそのように考えたとすれば、それが何らかの効果をもたらしたとはいえない。そして江亢虎がこの機会を利用して実現しようとした中国社会党の再建も、その後順調に進んだとは考えられず、詳細は今の所不明であるが、汪精衛政権の下で各党派の整理や統合が行なわれており、中国社会党の発展に有利な条件があったとはいえない。しかし江亢虎としては、ともかくも「中国社会党復党通告」を出し、『江亢虎文存』を出版できたことがわずかな慰めであったかもしれないが、一方ではこの出版が『江亢虎文存』のその後のさらに不幸な運命を決定づけたともいえる。かくしてこの書物は多くの人々から忘れられた存在となって、今日では図書館の書庫の奥深くに眠っている。

## 5. 結びに代えて

以上これまでに調べることができた江亢虎の一生や活動についての史料をもとに、とくに日本軍占領下での汪精衛政権との係わり等を中心に、可能な範囲で考察を試みた。最初にも述べたように、もともと史料の所在がかなり確められながら、それらの利用がいまだ十分にできないため、あらかじめ予想されたように、考察は不十分に終わらざるをえなかった。これを補足する仕事が将来私自身か他の研究者によって続けられることを期待して止まない。この極めて不十分な考察が将来のより完全な研究のための基礎となれば、まことに幸いである。

注

- 1) 「社会制度改造発凡三綱九目」(『思想一斑』所収) 3 ページ。
- 2) 『善後会議』 4 ページ。
- 3) 同上, 82~83ページおよび88~89ページ参照。なお、「善後会議会員録」中の江亢虎の名は同書57ページに見える。
- 4) 「江亢虎が謹んで各方面に告げる」(『江亢虎対時局宣言』所収) の中の「謹んで国民党に告げる」参照。同書, 9~11ページ。
- 5) 『江亢虎文存』の「再序」参照。この「再序」は短いので、ここに全文を引用しておく——「民国20年[1931年], 上海の中華書局は私の文存を出版することを引き受けた。すでに活字を拾い、紙型を作り、出版されようとしていた。当時政府は国民党中央党部に権限を与えて、全国出版審査委員会なるものをつくり、その本の発行を禁止した。私と書局はいずれも損害を被ったが、どうしようもなかった。いま木星がたちまちに一周し[木星は12年で一周する], 政局はすでに改まり、党の禁止令も少し緩んだ。門下生諸君が資金を出しあって、以前つくられた紙型を購入し、現代書局に渡して、印刷発行した。収録されている諸編のなかには時代性をもったものもあるが、すべて旧態により、世の盛衰のありさまを伺い、私のことが当たっているか否かを占いたい。民国21年[1932年]以後の作品については別に専集を印刷し、続いて刊行すべきである。顧みれば、十二年の間しばしば兵乱に驚き、世の変転常なき中で、この紙型が全部今尚残り、ついに世人に見えることができた。ただ時の早晩の差のみは人の力の左右しうるところではないようである。昔を今に戻したいと思っても、それはどうしようもないことだ。中華民國33年[1944年]元旦, 江亢虎, 南京考試院にて再序」
- 6) 「江亢虎的“新民主主義”研究」参照。
- 7) 『江亢虎対時局宣言』 3~4 ページ。
- 8) 「中国社会党復党通告」(『江亢虎対時局宣言』所収) 23ページ参照。
- 9) 「江亢虎が謹んで各方面に告げる」(『江亢虎対時局宣言』所収) 中の「謹んで共産党に告げる」参照。同書, 11~13ページ。
- 10) 「謹んで日本政府および国民に告げる」, 前掲書, 17~20ページ参照。
- 11) 前掲書, 22~25ページ。日付は民国28年[1939年]11月11日となっている。

(補注1) 中国共産党は当時コミンテルンの「大衆にはたらきかけるための闘争は、せまりつつある新しい強力な革命の高揚から中国の反革命派を救おうとしている国民党改組派、第三党、胡適派に、攻撃の矛先をむけねばならない」(コミンテルン「中国問題についての決議」, 1930年6月, 執行委員会政治書記局) という方針に基づいて、中間諸党派に敵対していた。村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第5巻(大月書店, 1982年12月) 221ページ参照。

(補注2) この書簡は『江亢虎文存』308～9ページに収録されている「敬告日本政府与国民書」を指し、民国20年(1931年)10月に書かれている。この書簡は「満洲事変」直後に執筆されたものだけに、日本軍の東三省への侵略行動に対する批判と警告が強く表現されているが、日本政府と国民に対する見方は1939年10月の時点でも基本的には変わっていない。なお、「敬告日本政府与国民書」の原文は上海滞在中の杉山文彦氏が筆写して送って下さった。労をとって下さったことに深く感謝する。この書簡の訳文は近く社会評論社から出版される『中国人の日本観』(仮題)第2巻に収録する予定である。

(1993. 10. 18.)

## (付) 江亢虎資料目録

(未定稿)

### A. 江亢虎著作

- \* 『江亢虎文存』 江亢虎博士叢書編印委員会・現代印書館 1944年1月初版〔原版 上海商務印書館 1932年〕
- \* 『江亢虎博士演講録』 第一集～第四集 山西教育会 [1923～24年]
- 『新俄游記』 上海商務印書館 1923年
- \* 『思想一斑』 北平 北京出版社 1935年9月
- 『亢廬近音』 香港亢廬出版部 1938年8月
- 「新民主主義新社会主義」 『申報』50周年紀念冊『最近之五十年』 申報館 1923年
- 「新民主主義新社会主義説明書」 『東方雜誌』19—16 1922年8月
- \* 『南方廻想記』 上海 中華書局 1924年 7月

- ・『洪水集』 上海 1920年(?) [未見]
- ・「無家庭主義」・「自由營業管見」 『新世紀』93期/97期 [署名：徐徐，安誠] 1908年
- \*『江亢虎對時局宣言』 1939年
- ・『回向東方』南京民意社 1941年

#### B. 江亢虎文献

- ・『楊杏仙文存』 上海 平凡書局 1929年11月
- ・張効敏「我對於江亢虎先生演講的批評」『長沙大公報』 1923年8月4日～12日  
“現代思想”欄
- ・中国第二歴史档案馆編『中国無政府主義和中国社会党』 江蘇人民出版社 1981年
- ・同『善後會議』 档案出版社 1985年
- \*『江亢虎陰謀復辟及南大驅江運動紀実』 上海南方大学学生会編印
- ・清水安三『支那当代新人物』 P.226～236 大阪屋号商店 1924年4月
- ・江佩偉・李昭曾「江亢虎的“新民主主義”研究」 『近代史研究』 1991年2月  
P.205～219・186
- ・蔣俊・李興芝『中国近代的無政府主義思潮』第五章 山東人民出版社 1990年
- ・李又寧・張玉法編『近代中国女權運動史料』 上・下2冊 伝記文学社(台北)  
1975年12月
- ・嵯峨隆・坂井洋史・玉川信明編訳『中国アナキズム運動の回想』 総和社 1992年9月

\*印：上海図書館所蔵

(付記) この目録は江佩偉・李昭曾両氏の論文に負う所が少なくない。